

# 職場でがん教育、対策の一手に

## がん社会 を診る

中川 恵一

がんは細胞の老化といえる病気ですから、高齢者が働き、社会を支える日本では、働くがん患者が増えるのは当然です。

この「がん社会」を生きていく私たちに必要なのは、科学的根拠に基づいたヘルスリテラシーを身につけること。

予防、早期発見、治療法の選択、仕事との両立といった様々な局面で、がんをコントロールし、ときには共生していくために必要な「新常識」といえるでしょう。

「がんリテラシー」の向上をめざす取り組みとして、私が評議員を務めている日本対がん協会（東京）が「働く世代のためのがんリテラシー向上プロジェクト」を始めました。プロジェクトは以下の三本の柱で構成されています。

①企業・団体のトップや健康経営、人事・総務担当者を主な対象とする無料オンラインセミナー  
②職場でのがん教育に役立つ情報のLINE配信  
③がんリテラシーを測定す

るテスト（有料）。

2月27日には、がん予防のスタートラインといえる職場の禁煙をテーマにした第1回のオンラインセミナーを開催します。私たちががん治療医のほか、がん経験者、治療と仕事の両立に詳しい社会保険労務士など、様々な立場の人が、LINE配信やテスト問題の作成などに関わりました。

働く人たちの死亡の半分、病死の9割が、がんによるものです。しかし、早くからがん対策に取り組み、手厚い制度が整いつつある大企業もあれば、課題山積で何から手をつければいいのか戸惑っている中小企業もあります。

なさんにはLINE配信やテストで気軽に学んでいただきます。  
がんは、多くの難病と違い、リテラシーを高めることで、ある程度はコントロール可能な病気です。がんリテラシーを会社全体で向上させることが、職場でのがん対策を進める最大のポイントといえるでしょう。

私もこのプロジェクトの「総台アドバイザー」として、全面的にサポートしていきます。

中学・高校では「がん教育」が必修化されましたので、がんを学んだ世代が大人になるころ、他の先進国と同様、日本のがん死亡も減ってくると思います。問題はがんを学ぶ機会がなかった大人たちなのです。

がんは最低限の知識と理解、そして、行動で運命が決まる病気です。「がんリテラシー向上プロジェクト」をお勧めしたいと思います。

（東京大学特任教授）



イラスト 中村 久美